



大阪府立北野高等学校図書館
第1号 2017.5.22

さあ、テストも終わったし、つづき読もか！

■図書ニュースって何？

今年度最初の「図書ニュース」です。新しく入った図書・資料や注目してほしい本を紹介します。また、図書館についての情報も載せます。本・図書館を身近なものにしてください♪

■みんな、何読んでるの？

この約一年間に貸し出された本の中から紹介しましょう。
どんと目立つのが宮下奈都『羊と鋼の森』です。2016年本屋大賞第1位の作品。やっぱりね。
次に、住野よる『君の膵臓をたべたい』。同じ作者の『また、同じ夢を見ていた』もよく借りられてるな。小川糸『ツバキ文具店』(ドラマ放映中)、澤田瞳子『若冲』(展覧会も話題)。池井戸潤『陸王』(10月にドラマ化予定)、そして、恩田陸『蜂蜜と遠雷』(直木賞+2017年本屋大賞)。やはり、話題の本がよく借りられています。

■北野っぼい？

また、英語の原書もくりかえし借りられています。J.K.ローリング『ハリーポッター』とか。
『数学オリンピック 1996～2001』、『数学ガール』、『高校生からわかるマクロ・ミクロ経済学』、『高校数学の美しい物語』といった理数っぼい本も上位に並んでいます。

■あらゆる本は私のために書かれている

みんなが読んでいる本、おすすめの本を読む。それはとても楽しいこと。同じ本を読んでいると話ができるしね。図書館で、友だちに「それ、いいよ！」とすすめている姿をよく見ます。図書館でも、先生や生徒サポーターの手なども借りて、おすすめの幅を広げて行けたらいいなと思っています。

それとは別に、「あらゆる本は私のために書かれている」というおまじないを紹介しておきましょう。
広告のように「おすすめ」を待っているだけでは、本の世界のおもしろさは広がらないし、深まらないのです。「直観読みブックマーカー」という遊びがあります。サイトから引用します。

「…ぶらぶらと散歩して、何気なく古ぼけた本屋に入り、ふと手にした古書を開き、その一文に天啓のようにハタと心打たれる、あの珍妙不可思議なる体験をご存じ？ …まるで自分が百年探し求めていたような、美しき言葉と出逢う。出逢ってしまう。…そんな偶然の、意外性の、無意識の、閃きの、浪漫的、夢のような読書のエトス(型)…」

これを遊びでやるのが「直観読みブックマーカー」。
①〈問い〉を決め、②目をつぶって本を開き、③偶然指で押さえたところにあるのが、〈答え〉。
手元の本でちょっとやってみますね。「愛って何？」という〈問い〉でやります。えいっ！
〈答え〉「ずっと待っていたんだけど、我慢できなくなって夕御飯は先に食べちゃったわよ。鍋ものだったんだけど」と妻は言った。」(村上春樹『国境の南、太陽の西』)

なるほど。これ、ほんとに偶然ですからね。でも、私にとっては、村上さんが私のために書いてくれたかのように感じます。マジで(笑)。
冗談みたいですが、ここには読むということの本質があります。今度本を読むとき、だまされたと思って、「あらゆる本は私のために書かれている」と思いながら、一行一行を読んでごらん下さい。あなたは、うーん、とうなるに違いない。

■国境の南にはいったい何があるんだろう

これを例えば『論語』だとか『聖書』でやれば、バンバン当たりすぎて、面白くないほどでしょう(つて変な言い方だけど)。でもじつは、「古典」というもののものすごさは、どんな〈問い〉にも答えてしまう広さと深さにあるのです。テキストの「古典度」をはかるには、この「直観読み」をやってみるといい。
恋してる人が、例えばトルストイの『アンナカレーニナ』の恋の心情描写を読んだとしたら、「なんでトルストイさん、私のきもち、わかるん！」って、きっと思うことでしょう。
これは逆に、問う人にしか、本は答えない、ということでもある。覚えといてね。

さっきの村上春樹『国境の南、太陽の西』ですが、去年「センター演習」に出てたんです。(こんなところで読みたくないよなあ)と思いつつ、読んでたら、ものすごくぜんぶ読みたくなって、授業準備ほったらかして再読しちゃった——と教室で話したら、「ぼくもぜんぶ読みました」っていつてきたひとがいました。ジュケンセーの時間を奪う罪な村上春樹だったわけです。ところが、あの作品には謎があって、その謎についての話になり、「それが知りたければ、加藤典洋『村上春樹イエローページ』の2巻を読んだらいい」といつてしまったので、彼はそれも読んじゃったと思う、たぶん。

問題文になってたあたり、ちょっと引用します。
「僕」は12歳。同級生の「島本さん」と二人きりで彼女の家でレコードを聴いている。

彼女はそれまでソファの背もたれにかけていた手をスカートの膝の上に置いた。その指がスカートの格子柄をゆっくりとなぞるのを僕はぼんやりと眺めていた。そこには何かしら神秘的なものがあつた。その指先から透明な細い糸が出て、それが新しい時間を紡ぎだしているように見えた。目を閉じると、その暗闇のなかに渦が浮かぶのが見えた。幾つかの渦が生まれ、そして音もなく消えていった。ナット・キング・コールが『国境の南』を歌っているのが遠くの方から聞こえた。もちろんナット・キング・コールはメキシコについて歌っていたのだ。でもその当時、僕にはそんなことはわからなかった。国境の南という言葉には何か不思議な響きがあると感じていただけだった。その曲を聴くたびにいつも、国境の南にはいったい何があるんだろうと思った。目を開けると、島本さんはまだスカートの上で指を動かしていた。体の奥の方に僕は微かな甘い疼きを感じた。

その後、別の中学に進み、ふたりはしだいに会わなくなっていく。

僕は島本さんと会わなくなってしまうから、彼女の何をいつも懐かしく思い出しつつづけていた。思春期という混乱に満ちた切ない期間を通じて、僕は何度もその温かい記憶によって励まされ、癒されることになった。そして僕は長いあいだ、彼女に対して僕の心の中の特別な部分をあけていたように思う。まるでレストランのいちばん奥の静かな席に、そっと予約済の札を立てておくように、僕はその部分だけを彼女のために残しておいたのだ。島本さんと会うことはもう二度とあるまいと思っていたにもかかわらず。

「問題文」はここで終わり(ホント罪ですね)。そしてこの作品も、あなたのために書かれています。そう思うでしょう？ 「国境の南にはいったい何があるんだろう」って、あなたも思い、今も思っている。また、心の奥の静かな席に、予約済の札をあなたも立てている——。
さて、つづきを読むとしましょう☆

◆図書館メルマガ〈本の森〉

最新の話題や情報を取りあげるメルマガ〈本の森〉を配信しています。
新着本が貸し出しオッケーになったときなどもお知らせします。